



筑波大学

University of Tsukuba

# TSUKU COMM

TSUKUBA COMMUNICATIONS 【ツクコム】

2024

TSUKU COMM【ツクコム】(筑波大学広報誌) 2024 令和7年3月発行 編集・発行：筑波大学広報局  
〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1 電話：029-853-2063 E-mail: kohositu@un.tsukuba.ac.jp URL: www.tsukuba.ac.jp  
©2025 筑波大学(本誌記事の無断転載を禁じます)





これまで季刊で発行していた筑波大学広報誌TSUKU COMMの中から研究者、卒業生、在学生を紹介する記事をWEB記事に移行し、それらを1年分まとめて冊子にしました。  
所属・役職・掲載の内容についてはすべて取材当時のものとなります。

## TSUKUBA FRONTIER

厄介な隣国との付き合い方を考える 04

EUから見る国際関係

東野篤子教授(人文社会系)

バイオアッセイで探る食資源の機能性 06

天然物のチカラを見つけ出す

礒田博子教授(生命環境系)

アダプテッド・スポーツの世界へようこそ 08

一人ひとりのニーズに寄り添って

齊藤まゆみ教授(体育系)

データ分析で健康サービスの質を探索 10

医療と生活をつなぐヘルスサービスリサーチ

田宮菜奈子教授(医学医療系)  
センター長(ヘルスサービス開発研究センター)

## TSUKUBA ALUMNI

地球科学可視化技術研究所 所長

芝原暁彦さん (2007年 生命環境科学研究科博士課程修了) 12

クリスピー・クリーム・ドーナツ・ジャパン株式会社 代表取締役社長

若月貴子さん (1992年 第二学群人間学類卒業) 13

漫画家

信濃川日出雄さん (2003年 芸術専門学群卒業) 14

ゴールボール女子日本代表

関影商事株式会社総合企画部

高橋利恵子さん (2022年 障害科学学位プログラム(博士前期課程)修了) 15



TSUKUBA FRONTIER



TSUKUBA ALUMNI

## CAMPUS LIFE STORIES

芸術専門学群 3年

王尾仁思さん 16

理工学群化学類 2年

松井了子さん 16

人間学群心理学類 2年

竹上淑世さん 16

人文・文化学群比較文化学類 2年

本田琉碧さん 16

医学群医療科学類 3年

福井仁海さん 17

理工学群工学システム学類 3年

遠藤こまちさん 17

社会・国際学群国際総合学類 2年

高倉南乃さん 17

情報学群知情報・図書館学類 3年

大川原菜摘さん 17

理工学群応用理工学類 2年

植木直生さん 18

人文社会ビジネス科学学術院

国際経営プロフェッショナル専攻 2年

富山 斎さん 18

人文・文化学群人文学類 2年

鷲澤 蓮さん 18

生命環境学群生物資源学類 4年

比嘉響佑さん 18

人間学群障害科学類 3年

岩岡知里さん 19

体育専門学群 3年

森 秋彩さん 19

生命環境学群地球学類 3年

両角裕介さん 19

人文・文化学群日本語・日本文化学類 3年

瀬瀬ほのかさん 19

CAMPUS LIFE STORIES



# TSUKUBA FRONTIER

人文社会系 教授  
東野 篤子

## 厄介な隣国との付き合い方を考える

### EU から見る国際関係

国家間の紛争は当事国だけの問題のように思われますが、そこに至るまでの歴史的な経緯や他の国々の動向など、多国間の関係性も大きく影響しています。こうした複雑で繊細なバランスの上にある国際関係を、EUの成り立ちや周辺諸国との関わり観の観点から、さまざまな情報を読み解き、知見を集結しながら探っています。

#### 拡大するEUが直面した課題

第二次世界大戦後に、ヨーロッパ各国間の戦争の防止と経済的統合を目指してEC（欧州共同体）が設立されました。これが発展し、1993年に創立されたのがEU（欧州連合）です。創立当時は西欧の6カ国のみだった加盟国は、現在27カ国にまで増えています。

冷戦後のEUは東西分断の解消を目指し、冷戦期にソ連の影響下にあった中・東欧諸国との統合も積極的に推進しました。EUに加盟することは、「鉄のカーテン」の向こう側にいた国々にとっても悲願でした。そして、そのようなEUの「東方拡大」が進んだ結果、東側の境界線に突き当たったのがウクライナです。ウクライナは長年、ロシアとヨーロッパの間で揺れ動き、また汚職や組織犯罪などの問題も抱えていました。EUからすると「厄介な隣国」だったのです。

課題や問題を抱えた国はすぐ加盟させるのではなく、支援を行いながら経済関係を強化していくのがEUのやり方です。2000年代前半から、ウクライナとEUの関係構築が進んでいくのですが、ロシアにとっては、それは自らの「勢力圏」の侵害でした。EUはロシアとも関係構築を進めようとしたがうまくいかず、2022年2月のロシアによる全面侵攻を迎えてしまいます。

#### 思い通りにはいかない国際関係

ロシアにとってもウクライナは隣国です。民族や言語、文化などの面で共通する部分も多く、ロシアはウクライナを自らの「兄弟国」と見なしているとされます。1991年のソ連解体を歴史的失敗と捉えるロシア人も多い。こういったことから、ウクライナは西側に接近するのをやめてロシアの勢力圏に「戻る」べきだというのが、プーチン大統領の「歴史観」です。外部の我々からすれば確か



#### 筑波大学人文社会系 東野ゼミ

扱うテーマはヨーロッパにおける戦争と平和の問題を軸に、ヨーロッパ国際関係史・政治史、安全保障と防衛、ヨーロッパにおける歴史認識問題や移民問題など、多岐にわたる。ゼミでは学類・大学院ともに、年度の前半はとにかく沢山の本を読み、まとめ、議論する。年度の後半は卒業論文、修士論文などの執筆指導が中心となる。学生の指導にあたっては、各学生の「全力で突き詰めて考えたいこと」を共に探し、言語化するためのサポートに注力している。



に理解しにくい考え方も知れませんが、現在のロシアの行動の動機の一つとなる考え方です。

ただ忘れてはならないのは、どのような政治と社会を選ぶのか、どのような地域協力に参加するのか等は、それぞれの主権国家の選択の問題です。ヨーロッパの国際関係はそのような原則に基づいて構築されてきたのであり、ヨーロッパ諸国の多くが21世紀の世の中に「勢力圏」的な発想は受け入れがたいと考えてきました。しかし、その考えは真っ向からずれます。あるべき秩序の姿とはなんなのか、共通理解を得るのは大変難しいことなのでしょう。

#### 情報の読み解きと知見の集結で

こういった分野の研究で重要なのは情報。OSINT (Open Source Intelligence)と言われる手法で、公開されている情報を統合的に分析して有用な情報を導きます。それには、情報を的確に読み解くことが一番大事です。さらに、地域研究や安全保障研究、交渉学等のさまざまな蓄積を生かすことも重要で、各分野の専門家が互いの知見を共有することが求められます。

それでも、どうやってこの戦争を終わらせるか、容易に答えが出ないのが現状です。どのような停戦条件なら守られるのか、このような侵略が再び発生するのを防ぐことができるのか。研究は直ちに流血を止めることはできず、そこが本当に歯がゆいの

ですが、それでも可能なことは沢山あります。戦時下の社会をいかに保つのか、国際社会の支援はどうあるべきか。幅広い視点からの分析や提言は、各国の政策にも生かされていくはずです。

#### 目まぐるしく変化する国際情勢を追って

元々の研究分野はEUを中心としたヨーロッパの国際関係で、ロシアやウクライナは、あくまでEUの重要な隣国としての研究対象でした。それが2022年のロシアによる全面侵攻以降、戦争という現象そのものを扱うようになり、研究の重点が大きく変化しました。それに伴って、これまでの自分の研究の枠組みや課題を見直す作業を進めています。

目まぐるしく変化する国際情勢は、腰を据えてじっくり研究することが難しい分野ですが、それもまた魅力の一つです。ロシアによる侵略がヨーロッパの国際関係をいかに変容させるのか、中国やインド等との関係はいかに変化するのか、これからも片時も眼が離れません。

#### PROFILE

筑波大学人文社会系教授、国際公共政策学位プログラムリーダー。慶應義塾大学法学部卒業、慶應義塾大学大学院修士課程修了、英国バーミンガム大学政治・国際関係研究科博士課程修了（Ph.D.）。OECD日本政府代表部専門調査員、広島市立大学国際学部准教授などを経て現職。専攻は国際関係論、ヨーロッパ国際政治。主な関心領域は、EUの拡大、対外関係、国際統合理論。現在はロシアによるウクライナ侵攻についても精力的に発信中。著作に『ウクライナ戦争とヨーロッパ』（分担執筆、UP Plus、2023年）。



生命環境系 教授  
礒田 博子

## バイオアッセイで探る食資源の機能性

天然物のチカラを見つけ出す

伝統的に食べられてきた食材やハーブの中には、体に良い、薬効があるとされるものが数多く知られています。それらの効能の科学的なエビデンスを得るための鍵がバイオアッセイ。そこに含まれる化合物が持つ機能を、生物材料を用いて評価する手法です。これを駆使して、地中海や北アフリカ地域の食の秘密を探ります。

### 食資源が持つ機能性

ある疫学調査によると、地中海食を食べている人たちは、そうでない人たちよりも長生きで、また、動脈硬化やアルツハイマー病になりにくいそうです。これは、地中海食にふんだんに使われているオリーブやローズマリーなどのハーブ・アロマ類の薬効ではないかと考えられます。他にも、地中海地域には、天然の動植物に由来するさまざまな伝承薬があります。日本で言えば漢方薬のようなものかもしれませんが、薬というよりはもっとカジュアルに日常生活の中に取り入れられています。そうすると、この地域に古くから伝わる固有の食資源が持つ力について、がぜん興味湧いてきます。

こういった、その土地の人たちが経験的に培ってきた知恵の本質を、科学的に解き明かそうとすると、分子レベルでの解析が必要になります。食材に含まれる化合物を調べ、それらがどういう機能を発揮しているのかを、安全性も含めて、さまざまな細胞や病態モデルマウスを使って評価する、それがバイオアッセイ(生物検定)という手法です。

### 40種類以上のバイオアッセイを駆使して

研究室では40種類以上もの多様なバイオアッセイを扱っています。これらの評価系を駆使して、食資源や伝承薬に含まれる天然化合物の機能を調べていきます。すると、例えば、コーヒーの成分に老化予防(認知機能改善)、オリーブの成分に抗うつ作用、のような有効な働きが見つかったりします。こういった機能は、がんなどの深刻な病気の治療というよりは、普段の健康を保つために有用で、だからこそ、応用範囲も広いと言えます。このことは医学分野の研究者か



### 筑波大学生命環境系 礒田研究室

食資源の機能性評価及び環境安全性評価において動物細胞工学を応用した40種類以上のバイオアッセイを用いて、新しい生理活性機能の探索やそのメカニズム解明に取り組む。研究テーマは、食資源の機能解析と有効利用、食品成分の機能性食品・化粧品シーズ化、乾燥地植生の機能性分布とデータベース構築、食品・環境安全性評価法開発など、多岐にわたる。乾燥地植生については、現地での調査と資料・情報収集も活発に行っている。



らも注目されていて、実際にヒトを対象とした臨床研究につながることもあります。これらの研究がシームレスに行えるのは筑波大ならではの利点です。

もちろん、天然化合物がなんでも良い、というわけではありません。しかし、とりわけ医薬の分野では、天然化合物をもとに新しい薬剤が開発される事例は珍しくなく、また、副作用を低減するために生薬が使われたりもします。食資源に含まれる天然化合物の働きをきちんと分析することは、創薬の基本となるだけでなく、食材が持つポテンシャルを引き出すことにもなるのです。

### 文理融合で地中海圏を研究する

これらの研究は、地中海地域の資源や文化について、現地の研究機関とも協働して、文理融合的に研究を行う、筑波大の「地中海・北アフリカ研究センター」の研究テーマの一つでもあります。食資源の他にも、サハラ砂漠の砂に含まれる高純度のシリカを太陽光発電に活用したり、水資源の管理、さらに、新しい経済圏としての国際関係構築など、実はこのエリアには、研究の種がたくさんあります。

伝承薬効の研究においては、現地へ行って調査をすることも大切です。その際、単に現地の人たちと意思疎通ができればよいわけではなく、言語や文化も含めていろいろな情報を得ることが不可欠です。センターには、地中海地域の文化や宗教などを専門とする研究者もいて、薬草を焚く儀式

などについて現地語で詳しく聞き取りをしつつ、さらに科学的な薬効も明らかになってくると、この地域についての理解がより深まります。

### これまでの研究成果を社会実装へ

学術研究としては、さまざま評価系のエビデンスに関して、これまでに500報以上もの論文を国際的に発表してきました。この蓄積は他にはない強みです。これらの成果の社会実装を目指して、創薬や機能性食品の開発を企画・提案するベンチャーも立ち上げました。経営となるとなかなか大変なこともあります。新しいビジネスモデルにするべく、日々奮闘しています。

ハーブやスパイスなどが持つ、味や香り以上の役割が分かってきたからこそ、こういった食材やその成分のより効果的な活用が求められます。毎日の食事で健康を保ったり、病気や老化が予防できるのなら、それはまさに、みんなのニーズ。高齢化社会におけるQOL(生活の質)の維持・向上に大いに貢献できるはずです。

### PROFILE

筑波大学生命環境系 教授/地中海・北アフリカ研究センター長、テラーメイドQOLプログラム開発研究センター長、産総研筑波大食薬資源工学OILラボ長、国際農林水産業研究センター監事、文部科学省科学技術・学術審議会国際戦略委員会を務める。2004年から地中海・北アフリカ研究センターで、地中海の食薬資源(オリーブ、アロマ薬用植物等)の機能性成分探索とメカニズム解析を進めている。専門は食品機能学、天然物創薬。

# TSUKUBA FRONTIER



体育系 教授  
齊藤 まゆみ

## アダプテッド・スポーツの世界へようこそ 一人ひとりのニーズに寄り添って

パラスポーツにも注目が集まるようになりました。でも実は、パラリンピックに聴覚障害者対象の種目はありません。それどころか、オリンピックに出場してメダルを獲得する聴覚障害者もいます。つまり、一言に障害といっても必要なサポートは人それぞれ。そこに柔軟に対応するための方法論が「アダプテッド」という考え方です。

### 「バラ」だけではない障害者スポーツ

聴覚障害は、一見するとそれとはわからないことが多く、他の障害に比べて、支援の必要性が気付かれにくいものです。一方、スポーツの世界では、特別な用具が必要なわけでもなく、健常者と一緒に競技をすることは可能です。けれども、聞こえない、というだけで、同じ土俵では競技ができないと排除されてしまうことがしばしばあります。

確かにスポーツには、音や声掛けによって、合図をしたりタイミングを測ったりする部分があり、競技自体のパフォーマンスは健常者と変わらなくても、この点が一緒に競技を行う上での溝になります。しかし、普段からそういったことに配慮した指導が受けられれば、オリンピックでメダルを取ることのできるのです。この溝をどうやって埋めるのか、教育と研究の両面からのアプローチが求められます。

### インクルーシブとアダプテッド

障害の有無に関わらずともに社会に参加する、というインクルーシブ社会の概念が広がってきました。ここで重要なのは、やみくもに一緒にするのではなく、目的に応じて必要な配慮を行うこと。それが「アダプテッド」という方法論です。聴覚障害者に対しては、例えば、話し始める前に、今から話しますよ、という合図をするなど、ちょっとしたことで、コミュニケーションや情報共有がうまくできるようになります。こういった工夫は、誰にとっても好ましいものです。

また、聴覚障害といってもそのレベルはさまざまで、補聴器などを使う場合もありますが、聴覚障害者同士の競技においては、全く聞こえない状態に統一します。そうすると、普段はなんとなく音を頼りに練習し



筑波大学体育系 アダプテッド体育・スポーツ学(AdS)研究室

「どのような障がいがあっても、その人にあった体育・スポーツ活動(アダプテッド・スポーツ)を展開することで多様なチャレンジができる」という理念のもと、さまざまなスポーツを専門とする学生が集まり、研究・実践活動に取り組む。障がいのある人のスポーツ・教育・福祉に関する基本的な知識と同時に、スポーツの持つ魅力と適応性を学び、実際の交流や体験を通して、アダプテッド・スポーツを实践できる人材の育成を目指す。



ていた選手に対しては、また別の配慮が必要になります。このような、その人のニーズに合わせて変更調整しながらサポートをする、というのがアダプテッドの考え方です。

### 実践を通じて学ぶ

この考え方は、実践が伴って初めて力を発揮します。その実践の場として、学生たちが聴覚障害者のスポーツ指導を行う授業を実施しています。実際に聴覚障害者と接してみると、座学で学んだ通りに支援してもうまくいかないことがたくさん出てきます。選手たちにとっては、細かい指示が伝わっていない、なんとなくできているからそれでよし、という指導が当たり前になりがちですが、それでは競技力は向上しません。その都度、きちんとフィードバックをすることが重要ですし、そういう指導を受けることで、短時間の練習でも、競技力は確実に向上するのです。

健常者であれば、こういったフィードバックは、「ナイス!」などの簡単な声掛け程度で済むかもしれませんが、しかし、そういう一つひとつの小さな工夫がアダプテッドそのものであり、その積み重ねが、指導する学生にとっても選手にとっても大事な経験になります。

### 聴覚障害に特有の難しさを解き明かす

パラスポーツというと、障害者スポーツの総称のように捉えられがちですが、パარი

ンピックに聴覚障害者対象の種目(デフスポーツ)はありません。「デフリンピック」という別の国際大会が開催されており、実はパラリンピックよりも古い歴史があります。聴覚障害者による聴覚障害者のための大会として、独自の文化を築いているとも言えますが、それは障害者スポーツとしてのウィークポイントでもあります。

そういう背景もあり、ちょっと取り残されてしまったような感のあるデフスポーツ。課題はたくさんあるのに取り組まれていないという問題意識から、この分野の研究に興味を持ちました。音のないスポーツは、見る者にとって、スピード感や臨場感を感じにくいかもしれません。でも、他のパラスポーツと同じように、楽しみ方がわかれば、全く違って見えるはずですよ。

2025年、デフリンピックが東京で開催されます。日本では初、そして第1回の開催から100周年にあたるこの機会を捉えて、デフスポーツやアダプテッド・スポーツの世界に新しいレガシーを作ろうと、意気込みも新たにしています。

### PROFILE

筑波大学体育系教授、体育専門学群副学群長。筑波大学体育専門学群卒業、筑波大学大学院修士課程体育研究科修了、筑波技術短期大学助手、筑波大学准教授を経て現職。専門はアダプテッド体育・スポーツ学であり、デフアスリート・パラアスリートの競技力向上や体育授業を担当する教員に必要なアダプテッドの視点に関する教育と研究に従事。水泳(水球)を特技とし、障害のある人への水泳指導やたいそう教室、つくりんピックを主催。

# TSUKUBA FRONTIER

医学医療系 教授／ヘルスサービス開発研究センター長

田宮 菜奈子

## データ分析で健康サービスの質を探る

### 医療と生活をつなぐヘルスサービスリサーチ

医療というと病院で受ける診療のみを想像しがちですが、健康に関するサービスには、病気の予防や治療後のサポート、介護など幅広い領域を含みます。日常生活において、それらは一連の流れの中にありますが、社会的な仕組みとしては縦割りになっていて、連続したケアが受けられないことも少なくありません。さまざまなデータ分析に基づいて現状の医療を含めた関連サービスの課題を可視化し、その質の向上を目指すのが、ヘルスサービスリサーチという研究分野です。

#### 医療を生活に「つなげる」ために

病院での治療が終わって自宅に戻った後、適切なケアが受けられているか、検診で異常が見つかった人が、きちんと治療を受けているか、治療や検診を行った医師にはなかなか知る術がありません。検診、治療、リハビリ、介護などを行う施設や担当医は異なっており、それぞれの間の十分な情報共有も行われていないのが現状です。せっかく高度な治療や検診を受けても、それらが適切なコストで提供され、その後の継続的な支援、そして健康につながらなければ、良い医療サービスだとは言えないのです。

医療関連サービス間の連携が重要であることは、概念としてはよく理解できます。しかし、実際にどんな課題があるのか、客観的、定量的に示されなければ、具体的な解決には結びつきません。さまざまな医療関連データを分析し、その結果に基づいて医療サービスの質的向上を図るのが、ヘルスサービスリサーチの目的です。

#### データ分析から 制度の改善点を見つける

データサイエンスが注目される中、医療分野においても、治療成績や感染症の拡大傾向などを把握する上で、統計やデータ分析の知識は必須です。個々の患者の状態から、集団としての疫学的な調査まで、幅広いデータ分析に対応できるよう、一定規模の病院や大学の医学部に、その専門家がいることの重要さは増えています。

医療サービスに関するデータはいろいろありますが、特に有用なものとしては、誰がどこでどのような診療を受けたかが記載されたレセプト(診療報酬明細書)や、国民生活基礎調査などの国の統計があります。こういったデータの中から必要な情報を分析用に加工する作業は大変ですが、データへのアクセス



#### 筑波大学医学医療系 ヘルスサービスリサーチ分野

日本で初めて大学に設置されたヘルスサービスリサーチ分野の研究室。医療における各種サービス(看護・保健・福祉を含む)の質を包括的・科学的に評価・分析し、実証データに基づく学際的研究成果を通じて、サービスの質向上を図り、生活と調和した医療実現の一助となることを目指す。全国規模のビッグデータを扱う研究も実施しており、さまざまなデータを利用した研究を支援するとともに、ヘルスサービスリサーチの普及にも注力する。



は、かつてに比べると随分良くなっています。

分析結果は、論文として発表するだけでなく、国の医療サービスの改善に向けた提案などにもつなげており、実際に診療報酬が加算されるなどの変化も現れています。また、自治体からの委託を受け、地域ごとの医療計画に関するデータ分析にも携わっています。

#### ヘルスサービスリサーチ研究を 日本へ

ヘルスサービスリサーチと出会ったのは、アメリカのハーバード大学公衆衛生大学院でした。臨床医として、自分が担当した患者のその後が把握できないことに疑問を感じて研究を始めたものの、日本では研究分野として確立されておらず、アメリカに渡りました。そこには、医療の質を測る学問であるヘルスサービスリサーチが講義として存在し、統計やデータ分析が大学院の必修科目になっていました。データ分析の結果が実際の政策にも生かされており、この分野の研究の重要性を実感しました。

帰国後しばらくは、思うように研究を進めることが難しい時期もありましたが、最近では、公的データの利活用が推進され、ビッグデータを扱ったり、複雑な解析を行うこともできるようになってきました。そういった時代の流れも研究の追い風になっています。

#### より良い医療サービスのために

そんな中、日本でもヘルスサービスリサーチに興味を持つ人たちが増えてきました。研究室には、医師、看護師、理学療法士など、学生だけでなく現役のさまざまな医療従事者



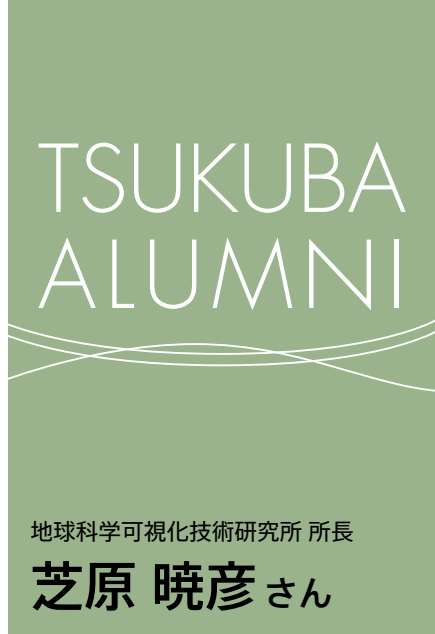
Make difference through high quality HSRをモットーとした研究成果の数々

が集まり、それぞれの課題意識に基づいた研究に取り組んでいます。特定の手術を受けた人の術後の経過、高齢者に処方する薬の種類や量、救急車で搬送された人が受ける医療の内容、大学病院と地域医療の連携、在宅医療のニーズ、などなど、研究テーマは多種多様です。ここから巣立った人材が各地の病院や大学などで活躍しており、人材育成の面でも少しずつ手応えを感じています。

また、筑波大では2017年にヘルスサービス開発研究センターを設立し、地域医療や介護サービス事業への展開などを視野に入れた、自治体や企業との連携による研究が進められています。さらに、公的統計のミクロデータ(調査票情報)を、許可を受けた研究者に提供するオンライン施設が学内に設置されました。ヘルスサービスリサーチの先駆者として、より良い医療サービスの実現を牽引していきます。

#### PROFILE

筑波大学医学医療系教授。1986年筑波大学医学専門学群卒業、1990年東京大学大学院医学研究科博士課程(医学博士)、1994年米国ハーバード大学公衆衛生学部修士課程修了。1999年南大和老人保健施設 施設長、2000年帝京大学医学部衛生学公衆衛生学教室講師などを経て、2003年筑波大学ヘルスサービスリサーチ分野教授、2017年筑波大学ヘルスサービス開発研究センター長兼任、日本公衆衛生学会理事(2017年～現在)、2023年第82回日本公衆衛生学会総会会長。



これまでのキャリアや生活において、  
筑波大学でよかったと思うこと

学生時代は、化石をデータとして扱う研究をやっている、その後も産総研(産業技術総合研究所)で同様の研究を続けました。現在は、それを事業化して、化石と、その発掘場所の地形や地質などのデータを、精密な立体地図上にプロジェクションマッピングで可視化するシステムを開発・販売しています。筑波大での研究もベースにあるので、産総研発と筑波大発、両方のベンチャーとして承認されています。

最近、メタバース空間でバーチャルに化石発掘を体験するプログラムも開発しています。コロナ禍で、博物館などが閉じてしまったのがきっかけでしたが、普通の博物館では絶対にできない体験ができるし、そういう需要があることも分かりました。データさえあれば、極端な話、他の惑星でも可視化できますよ。

筑波大では他の学群の授業も選べるので、地球科学の他に、もともと好きだった機械工学の授業をよく聞きに行きました。逆に、情報処理の学生が化石の実習に来たり。今、化石とテクノロジーの両方を扱えるのは、その頃の下地があったからだと思います。

### 学生時代の一番の思い出

大巡見というフィールドワークの授業があって、島根から福井まで、船や陸路で移動しながら、有名な地層をあちこち観察するんです。地球科学は時間と空間のスケール



## 化石とテクノロジーの合体が生み出す新しい可視化のカタチ

ルが、日常の感覚よりはるかに大きいので、そのスケール感を拡張させる体験ですね。大学院生の頃は、北極海の方へも調査に行きました。大学をベースキャンピングに、冒険している感じでした。

それから、SF研究会。いろんな学生が集まっていた、単にSFをみんなで読むのではなくて、例えば、いきなり牛久大仏に連れて行かれて、大仏とSFに登場するロボットの大きさを比べたりしました。これも、日常生活にはないスケール感を身に付けるということで。

あとは自宅アパートで特撮映画を撮っていました。指人形みたいなものから始めて、そのうち、工作機械を使っているようなミニチュアを自作するようになりました。これが、今やっていることの源流ですね。

インタビューのロングバージョンは、  
筑波大学Podcastでお聴きいただけます。



### 筑波大生に向けてのメッセージ

筑波大の一番いいところは自由にいろんな学部の情報を横断的に捉えられることだと思うんです。そういう機会って、人生でいつでもあるわけではないので、在学生の皆さんには、ぜひこの環境を楽しんでほしいです。これから筑波大を目指す人たちも、ぜひ来ていただいて、楽しいことしましょう！

**PROFILE** しばはら あきひろ  
福井県出身／2007年 生命環境科学研究所博士課程修了／地球科学可視化技術研究所 所長



これまでのキャリアや生活において、  
筑波大学でよかったと思うこと

現在はクリスピー・クリーム・ドーナツ・ジャパンという会社の社長として、経営改革から組織人事、商品開発、さらには将来展望も含めて、さまざまな意思決定に携わっていますが、大学での専攻は教育学、生涯学習でした。母校に教育実習に行けるというので、わりと軽いノリで教員免許を取りましたけど、学校の先生になる気は正直、ありませんでした。今のような経営に関わることは、就職してから学びました。

大学で学んだことが実社会に結びついて結構難しくて、むしろ、好きな授業をいろいろ取れたことが、自分の引き出しを増やしてくれたし、幅広く物事を見られるようになったと思います。専攻とは全く関係ない、楔形文字や世界史なんかの授業がきっかけで、何かを考えたり調べたりする面白さに気づきましたし、教育実習では主専攻とは違う世界史を選ぶこともできました。

そんなことを、ふとした時に、すごく良かったなと思い出したりします。そういう、なんでもありな人材を育てるっていうのが、筑波の良さなのかもしれませんね。

### 学生時代の一番の思い出

やどかり祭の実行委員だったんです。2年生の時、模擬店の担当で、仕入れだとか、先輩から引き継いだやり方をもっと効率化できないか、アイデアを出して実行しました。当時から、自分の裁量で引っ張っていくようなことが好きだったのかもしれ



## 自分の引き出しを増やす経験を

ませんね。

TX(つくばエクスプレス)がなかった分、自分も含めほぼ全ての学生が車を持っていた、あちこち遠出もしました。でも学内では、一度、課題の提出期限ギリギリに教職員用の駐車場に停めようとしたら、そのスロットの持ち主の先生がやってきて、その場で30分ぐらい怒られました…。

今思えば、東京など他地域で活動している、筑波以外の学生と交流する機会が欲しかったなと思います。今ならインターネットでつながることもできますけど、当時は物理的に行かなければならなかったのが、物事が全部、筑波の中だけで完結するようなことが多かったですね。そういう閉じた生活もそれなりに面白かったですけど。

インタビューのロングバージョンは、  
筑波大学Podcastでお聴きいただけます。



### 筑波大生に向けてのメッセージ

私自身、筑波大を選んだ理由は、ちょっと変わった大学だと思ったからなんです。他の大学とは違った環境だと、他の人とは違ったものが学べるし、他では得られない経験ができます。それは、社会に出た後も絶対に無駄にはなりません。振り返った時に筑波大で良かったと思える経験をたくさんしてください。

**PROFILE** わかつき たかこ  
新潟県出身／1992年 第二学群人間学類卒業／クリスピー・クリーム・ドーナツ・ジャパン株式会社 代表取締役社長



# TSUKUBA ALUMNI

漫画家

信濃川 日出雄 さん

これまでのキャリアや生活において、  
筑波大学でよかったと思うこと

グラフィックデザインを勉強しようと思っ  
て筑波大に來ましたが、大学でいろいろ  
学ぶ中で、デザインに込められたコミュニ  
ケーションを意識するようになりました。そ  
れで、漫画という媒体を通じて読者とコミュニ  
ケーションするのが楽しいと思ったんで  
す。漫画自体は子供の頃から描いていま  
しが、大学3年の時、就活するようにつも  
り、独学ながら本格的に描き始めて、現在  
は、2015年から開始した「山と食欲と私」と  
いう作品の連載を続けています。

この作品は、主人公の若い女性が、毎  
回、一人で山に登って、食事を作って食  
べる、というだけの話なんですけど、登山は学  
生時代の友人に誘われて始めた趣味です  
し、自炊をはじめて料理をおぼえたのも学  
生時代。漫画には、当時の友達をネタにし  
たキャラクターもたくさん登場します。だ  
から、その頃に培ったもので、なんとかこ  
までやってきたという感じがしています。

## 学生時代の一番の思い出

1年の時、雑誌から切り抜きをして、その  
素材を使ってコラージュ作品を作るという  
初歩的な課題が出されたんです。でも19  
歳の青年にとっては、すごく気合が入りま  
して、B4サイズで提出するという条件で念  
押しされていたんですけど、絶対に目立っ  
てやろうと、B1サイズで提出したんです。結  
局、そんなサイズで作ってきたのは自分だ  
けで、担当教官からはすごく迷惑がられま



# 登山も、食も、漫画も、 筑波大から始まった

して。でもちゃんとA評価を付けてくれまし  
た。作品として、そのサイズには必然性があ  
ると認めてくれたんですね。それがとても印  
象に残っています。この大学はこれでいいん  
だ、と思えました。自分としては非常にイン  
パクトのあるものを作ったつもりだったので、こ  
れで低評価だったら、多分、こじらせていた  
でしょうね。

漫画の世界ってまさに、ページが多かっ  
たり、はみ出たりしていても、面白いものが  
勝ちです。そういう意味で、あの時評価して  
もらえたことは、本当にいい思い出です。

## 筑波大生に向けてのメッセージ

筑波大ではのびのびと過ごして、いろい  
ろ迷惑もかけたと思いますが、大目に見て  
もらったことに感謝しています。そんなふう  
に受け入れてくれる環境なんですよ。すご  
く独特で、孤高の存在のような感じもしま

インタビューのロングバージョンは、  
筑波大学Podcastでお聴きいただけます。



すけど、そういうところに惹かれる人たちっ  
ていると思うんです。もっと言えば、都会よ  
りも、雑音を排除して自分の世界に没頭し  
て、何かを深めたいという人には向いてい  
るので、ぜひとも、この筑波大の環境を活  
用してほしいです。

PROFILE しなのがわ ひでお

新潟県出身／2003年 芸術専門学群卒業／漫画家



# TSUKUBA ALUMNI

ゴールボール女子日本代表  
関彰商事株式会社総合企画部

高橋 利恵子 さん

これまでのキャリアや生活において、  
筑波大学でよかったと思うこと

競技を優先しながら働けるということ  
で、現在の会社に就職しました。仕事として  
は、障害のある当事者として、社内外での  
D&I(ダイバーシティ&インクルージョン)の  
推進に携わっています。他に、ゴールボール  
の普及啓発や障害理解に関する講演や体  
験会なんかもやらせてもらっています。

障害のことを多角的に学んで、特別支援  
学校の教員になりたいと思って筑波大に進  
学したんですけど、他の学群学類の授業も  
受けることができて、すごく視野が広が  
りました。授業での配慮や、学内のバリアフ  
リーも充実していて、不自由なく過ごすこ  
とができました。

また、競技との両立をしていく中で、スケ  
ジュール管理や気持ちを切り替える力も身  
についたと思います。社会人になってもそ  
ういう環境にしたいと思えたのは、筑波大で  
の経験があったからです。これからも、  
障害の有無に関わらずいろんな選択肢が  
あることを伝えていきたいなと思っています。

## 学生時代の一番の思い出

寝坊して授業に大遅刻してすごく恥ずか  
しかったこととか、電車で座っている時に  
うとうとしてゴールボールの夢を見て、いき  
なり隣の人にバーンってやっちゃったり。練  
習がきつくて、という言い訳をしてはいけ  
ませんが、そういう思い出はたくさんあります。

6年間の学生生活で、学内の水たまりス  
ポットや植物が歩道にはみ出している場所



# ゴールボールをもっと みんなに！

なんかも熟知して、ちゃんと避けて歩けるよ  
うになりました。変なスキルですけど。それ  
に、図書館や施設部の職員の方には、書籍  
の電子化や、寮の設備の改善などで、随分  
相談にのってもらいました。

あとは、もっと大学でゴールボールの普  
及をしたかったですね。部活とまではい  
かなくても、スポーツ・デー(学生と教職員  
が共にスポーツを楽しむ学内行事)の種  
目に入れてもらうとか。体育の授業に取り  
入れては、と提案したこともあるんですけ  
ど、ゴールボールは危ない、というイメージ  
があるみたいで。とにかく少しでも学生に  
ゴールボールに関わってもらうことができ  
たらよかったなと思います。

## 筑波大生に向けてのメッセージ

筑波大での6年間は本当にいろんなこと  
をやらせてもらいました。ゴールボールもそ

うですが、学問でも本当にさまざまなこと  
を学べる環境があって、他学類の学生との  
交流などを通して、多くの人とのつながりも  
できたと思っています。

いろんなことができる大学なので、ぜひ  
たくさんチャレンジしてもらえたら嬉しい  
ですね。

PROFILE たかはしりえこ

広島県出身／2022年 障害科学学位プログラム(博士前期課程)  
修了／ゴールボール女子日本代表・関彰商事株式会社総合企  
画部



インタビューのロングバージョンは、  
筑波大学Podcastでお聴きいただけます。



## 王尾 仁思さん

芸術専門学群 3年  
茨城県出身



砂漠のような絵画用パレット「Sahara」

① 基本的に家に籠って何かを作ったりするのが好きな人間ですが、ふいに人と話したくなった時にふらっと行ける距離に大学があり、話を聞いてくれる友人や先輩がすぐ近くに住んでいることが魅力だと思います。最近は何もかも外に開いていることが正しいとされがちですが、閉じられたコミュニティの良さも感じます。

② 筑波大学の学生であるうちに形にしたいアイデアがいくつかあります。その行為がデザインであるのか、アートであるのか、はたまたそれ以外なのかは分かりませんが、リアルな境界線が揺らぎつつある時代の中で、本当の意味での豊かさや普遍的な美しさを表現できればと思います。

## 竹上 淑世さん

人間学群心理学類 2年  
愛知県出身



雙峰祭の準備中に友人が撮ってくれました！

① 所属サークルのミュージカル集団ESSASSAや学園祭実行委員会で様々な個性を持った面白い人たちから多くの刺激をもらいつつ、自分の大好きな「ステージ」を学びながら作れることが本当に楽しいです。また、大学図書館が近いので授業で気になったことをすぐに調べられたり、好奇心のままに新しい本を探してみたり、が出来るのも楽しいことの1つです。

② やりたいことに前のめりで挑戦し、沢山の刺激を受け、視野を広げていきたいです。サークルではキャストとしてもっと実力をつけ、「自分の表現したいこと」をより豊かに表現できるようになりたいですし、海外留学に行き、自分の知らない世界を知ってもっと多様な価値観を学びたいです。興味が広い分、それらをきちんと両立してやりきることが1つの目標です。

## 松井 了子さん

理工学群化学類 2年  
東京都出身



テック系理系学生人材シリコンバレー派遣プログラム

② 現在、先導的研究者体験プログラム(ARE)を申請中です。もし採択して頂けたら、「ガス分子貯蔵を目的とした新規機能性大環状分子の開発」をテーマに、研究に奮闘していきたいです。そして自分の研究を「発信」する機会も積極的に作ることで、研究のアドバイスを頂いたり、他の研究生と積極的に交流していきたいです。

## 本田 琉碧さん

人文・文化学群比較文化学類 2年  
東京都出身



① 筑波大学で楽しいことは洋服製作を通して様々な学生と関わり、色々な分野を横断して学べることです。私は中学2年生から独学で洋服作りを始めました。筑波大学は総合大学なので多種多様な授業で学んだ知識を活かした洋服のコンセプトを作り、哲学や建築、文化、医学、プログラミングなどのファッション以外の分野に特化した学生とのコラボレーションを通じて、新たなファッションのあり方を考え洋服制作を行っています。

② 1年次では筑波大学で製作チームを設け東京都主催のNext Fashion designer of Tokyoのファイナリストとして服を製作しました。テーマは「呼吸」人種や性別関係なく、誰もが行うがその日の気分や感情で変化する、流動的であり個性的な呼吸を、光というテクノロジーを用いて可視化できる洋服を製作しました。また今年の夏にはオーストラリアで開催されるアルスエレクトロニカでの展示も決定しています。

## 福井 仁海さん

医学群医療科学類 3年  
埼玉県出身



① 筑波大学の医療科学類には、病院就職を考えている人、企業就職を考えている人など、描いている将来像が多様です。3年生になると本格的に将来を考え始めるので、学類の友達と将来の話で盛り上がる事が多々あります。自分にはない考え方を持っている人が周りに多くいて、様々な刺激を受けることができ、とても楽しいです。

② 2024年9月より、オーストラリアに1年間留学し、語学学校と大学に通います。留学する理由としては、海外の企業に就職したいと考えているからです。積極的にコミュニケーションをとって、語学力はもちろん、多くの文化や考え方に触れてきます。留学してよかった、いい経験になったと思える1年間を過ごし、この経験を将来に将来に活かしたいです。

## 高倉 南乃さん

社会・国際学群国際総合学類 2年  
福岡県出身



① 学類にとらわれずに授業を取ることができるので、自分と専門分野が違う人ともたくさん交流ができて楽しいです。また、サークル活動を通して、筑波大学生はもちろん、他大学の学生とも仲良くなれて楽しいです。

② サークル活動を通して、さらに建築について学んでみたいです。また、国内、国外ともにボランティア活動を通して、人々との交流を楽しみながら、少しでも自分以外の誰かの力になりたいです。

## 遠藤 こまちさん

理工学群工学システム学類 3年  
東京都出身



① 開発に精を出して大学の研究室で寝泊まりしたり、友人の家で深夜まで遊んだり、留学生と寝食を共にしたり…多種多様なバックグラウンドを持つ学生が1つのキャンパスの中で共同生活を送っている筑波大学だからこそ、深掘りされた学生同士の交流というのが何よりも楽しみだと感じます。

② 現在は所属団体である筑波大学「結」プロジェクトでの超小型人工衛星開発を始め、航空宇宙に係わる研究・開発や国際交流に注力しており、特に学生時代には開発中の衛星TSUKUTOの打ち上げ及び運用まで見届けたいと考えています。

## 大川原 菜摘さん

情報学群知識情報・図書館学類 3年  
岩手県出身



筆者前列右側

① 筑波大学周辺に住んでいる人がほとんどのため友人たちと踊ったり、話したり、遊んだり……。多くの時間を共有し、深い絆で繋がった仲間たちと行うサークルのイベントはどれも忘れられない思い出になっています。サークルといえど、高校の部活並みに全力で取り組む人が多く、高め合いながら成長できる環境にいられることはとても楽しく、今の居場所にいられることはすごく幸せなことだと日々感じています。

② 筑波大学の学生として、私は学業だけでなく、サークルの活動にも熱心に打ち込んできました。入学後に始めたブレイクダンスを通じて多くの人と繋がり、人生観が変わったり、今まで想像していなかった経験をさせていただいたりしました。秋ごろにサークル自体は引退となるのですが、OGとなったあとも、研究と両立しながら茨城のダンスシーンに貢献していきたいと考えています。

① つくば(筑波大学やつくば市内)で楽しいことは何ですか。  
② 筑波大学の学生として学生時代に成し遂げたいことは何ですか。

## CAMPUS LIFE STORIES

## 植木 直生さん

理工学群応用理工学類 2年  
東京都出身



① 筑波大学は自分が所属する学類に関わらず、多様なことが学べる学際性に富んだ大学だと思います。私は分子に関わる研究を行いたいと考えていますが、脳科学、ロボットや教育にも興味があり、それらについても学びを深めています。またつくば市には産総研、JAXAやNIMSなど様々な研究所が集まっており、それらの見学に行くのも楽しみです。

② 私はロボットサークルに所属しており、NHK学生ロボコンの決勝トーナメント進出に向けて邁進しております。大学生から始めたロボット製作は、厳しく、ままならないものですが、その分やり遂げた際の喜びは大きいです。また、分子の光異性化に関する研究をAREプログラムにおいて行っており、そちらでも成果を出し、学びを得たいです。

## 鷺澤 蓮さん

人文・文化学群人文学類 2年  
新潟県出身



① 友達との談笑です。私は大学周りを散歩したりレストランで食事を取りながら友達となんでもない話をよくしますが、つくばは都会の喧騒から離れた落ち着いた場所なので非常に落ち着いた気分になれます。筑波大学の学生には卓越した能力を有した方や立派な志を抱いた方が多く、彼らのお話を聞くのは筆舌に尽くし難い喜びとなっています。

② 語学力の上達です。入学時は受験勉強を通じて英語が得意になったと自負していましたが、外国人の方とのコミュニケーションが上手いかなかったことから現代に必要なレベルには到底達していないと痛感しています。在学中に海外での生活や就労などを体験して語学力を磨き、将来ワールドワイドに活躍する人材になれるよう励んでいます。

## 富山 斎さん

人文社会ビジネス科学術院国際経営プロフェッショナル専攻 2年  
神奈川県出身



① 私たちが通う社会人向けの東京キャンパスMBAコース(国際経営プロフェッショナル専攻)は、学年全体で30名強と少人数で、海外からの学生が約30%在籍しています。学生の年齢層は20代から50代までと幅広いですが、授業以外の時間でも交流があり、国籍や年齢を超えて親しい仲間ができたことは一生の宝物です。

② このMBAコースは2025年に20周年を迎えるため、20年間の卒業生が一同に集まるイベントを企画しています。卒業生のネットワークは、卒業後の就職や転職の際に貴重な財産となるため、OB/OGの先輩方と交流を深める活動を始めました。今後は卒業生の会の活動の幅を広げ、社会貢献活動にも力を入れたいと考えています。

## 比嘉 響佑さん

生命環境学群生物資源学類 4年  
沖縄県出身



① 身近に友人が住んでおり親密に関われる一方で、総合大学として開かれた学びが体験できることです。総合学域群に所属していた時は、文理を問わず講義を受け、知見を深めました。生物資源学類に移行した後も幅広く農学を学び、最終的に排水処理工学にたどり着きました。親しい友人を作りやすい環境で、自分のやりたいことをじっくり探せるのが魅力です。

② 日本では未だ実験段階の先進的な水処理技術であるAerobic Granular Sludge (AGS) の導入を進めるため、理論的裏付けを提供することが私の課題です。Life Cycle Assessment (LCA) による定量評価を取り入れ、技術導入を円滑に検討できる基盤を築きます。研究室の同僚や学外の専門家と協力し、新技術を活用した持続可能な未来の創造に貢献します。

## 岩岡 知里さん

人間学群障害科学類 3年  
群馬県出身



① 移ろいゆく四季が織りなす情景を楽しめるところです。私は学内の宿舎に暮らしていますが、夏には玄関先でカブトムシと出会い、秋には紅葉で真っ赤に染まる木々を堪能しています。さらに筑波山に登れば、春は梅やつつじ、夏はあじさい、秋はもみじ、冬は澄んだ空気の中で輝く夜景と、四季折々の美しさを満喫できます。

② 障害科学類で専門性を身につけるため日々学業に励んでいます。それと同時に、学びを発信したり、他の学問領域と交流したりすることも大切にしています。例えば、「筑波大学りんごの棚プロジェクト」を通じて、障害について他学類の学生に知ってもらう機会を創出しました。今後もこうした活動を継続し、学びの幅を広げていきたいです。

## 両角 裕介さん

生命環境学群地球学類 3年  
長野県出身



フィールドでの地質調査にて

① 多くの友人が大学周辺に住んでいるので、気軽に集まって課題討伐会やおしゃべり会を開いたりできるのが筑波大の楽しいところだと思います。夜通し研究の議論をしたり他愛もない話をしたり、なんてのはよくあります。また、筑波大には自分の学類以外にも、冬虫夏草、民俗学、八目鰻など何かに熱中するオタクが大勢いるので、良い刺激となって楽しいです。

② これまでワニやクジラなど、水棲動物の化石に関する研究を進めてきました。データが集まってきたので、今後論文化できるように頑張りたいです。また来年度からは卒業研究も行うので、同時並行で頑張りたいです。しかし、様々な場面で知識や語学力が足りていないと感じるので、学術的な場や国際的な場でも通じる力を養っていきたいです。

## 森 秋彩さん

体育専門学群 3年  
茨城県出身



① パン屋巡りをすること。つくば市はカフェやパン屋さんが多く、休日に食べ歩くのが趣味。また、筑波山登山も1年のうち何度かする。豊かな自然に囲まれながら登っているとすがすがしい気持ちになる。

② クライミングと哲学を掛け合わせた新しい知見を明らかにし、卒論にまとめる。  
筑波大学大学院に進学する。(哲学研究室)  
私のクライミングする姿をたくさんの方に見てもらうことで魅力を感じ取ってもらい、クライミングをメジャースポーツにする。  
人間力のある大人になる。

## 瀬瀬 ほのかさん

人文・文化学群日本語・日本文学学類 3年  
岐阜県出身



① サークル活動です。私はテニスサークル、学類サークルに所属し、加えてT-ACTの活動にも参加しています。そのすべてにおいて素敵な仲間に出会えて、充実した大学生活を送ることができていると感じます。一つのことにみんなで熱くなったり、夜が更けるまで語ったりと、つくばの距離感ならではの楽しさもあると思います。大学生でこんな青春できると思ってなかったです！

② 卒業論文のテーマにしている「地歌舞伎」についての研究を深めたいと思っています。T-ACT「筑波大学かぶき會」において、夢であったつくばでの歌舞伎公演を無事やり遂げることができました。自身が今まで地元で地歌舞伎に関わってきた経験とつくばでの公演を踏まえて、地元を受け継がれてきた伝統芸能の継承発展について研究し、成果を残したいです。

① つくば(筑波大学やつくば市内)で楽しいことは何ですか。  
② 筑波大学の学生として学生時代に成し遂げたいことは何ですか。

## CAMPUS LIFE STORIES